

# 現代体育教授学の構想と展望 (V)

— システム論からのアプローチ —

松岡 重信・李 捷

(1995年9月11日受理)

Imagination and Development of Physical Education Didactics (V)

— From the Viewpoint of the Systemic Theory —

Shigenobu MATSUOKA, Jie LI

Dr. Yoshimoto had constructed and made the very smart and clever the framework of didactics or the key concepts for the primary education since 1980. It has been suggested that the functions of deviation amplifying or positive feedback was more important in the physical education class of the secondary school students than the function of deviation counteracting or negative feedback according to the systemic theory of Dr. Maruyama. Then we tried to make the concepts for the secondary school physical education. The students of secondary school are clearly different from the students of primary school in their ages, their experiences and their developmental levels, then the key concepts for the didactics must change in Japanese cultural climate of country. We made a key concept of 'justice and humanity' 'relationships' in Japanese language in addition to Dr. Yoshimoto's concepts. Especially the physical education teachers in junior high school or high school, must understand what a justice and a humanity are. Our discussions were summerized as follows;

- 1) It would be suggested that the function of deviation amplifying or positive feedbacks becomes more and more important perspective than the function of deviation counteracting or negative feedbacks in physical education class.
- 2) The imagination of physical education didactics in secondary school must be considered to the 'relationship' full of 'justice and humanity' in additionally Dr. Yoshimoto's key concepts of 'a look lovely, hold discourse with and inquire of'.
- 3) The characteristics of Non-linear in the students are very popular, but they are not concrete and changeable, therefore we have to contact directly with our students.
- 4) The characteristics of Non-linear in students of secondary school give a opportunity to evaluate feedback to physical education teachers.

## I 序論 — 体育教授学における近代と後近代 —

本論における体育教授学ということばにすら、ある種の時代錯誤と違和感を感じる。さりとて簡単に例えば「スポーツ教授学」と翻意するにも後ろめたさを自覚する。その理由は、これまでも幾度となくふれてきたように、特に後期中等教育学校における「体育科」の改変・消滅の可能性（「選択教科」への移行、「スポー

ツ科」への改称問題も含めて）をますます感じるからである。だが、現実問題としても体育科や保健科の内容の見直しや、授業展開の技術的解明とその実践化への見直しをもたねばならないとする問題意識は根底にある。

### 1) 近代と現代と後近代の視点

教授学にかかわる「近代」と「現代」の区別を吉本は、哲学思想上のヘーゲル (Hegel, G. W. F.) の死後

に続く、混沌とした社会のもつ思想問題をマルクス (Marx, K) とキェルケゴール (Kierkegaard, S. A.) が、その時代の任を負うた時からであるとした<sup>9)</sup>。教授学思想そのものからは、コメニウス・ペスタロッチやフレーベルを近代の巨匠と位置づけながら、彼らの教授学的特徴を「人間の発達形式を連続的・暫進的な過程としてとらえられることは、原則的にいって近代教授学の志向である<sup>10)</sup>。」そして、これに対して現代教授学の特徴は、「この前提を疑い、人間のもつ陶冶可能性の自然成長を問題視、単なる連続発達の過程を疑い、そこから非連続と断絶の論理」を主張するものであった。かくして非連続と断絶をいかに統一するかが近代と現代をつなぐ論理であったとする。しかし、わが国のように学校が強烈に一般化して、誰もが行かねばならない「制度としての教育」「強制としての教育」と化してしまった時、どうにもならない閉息感を自覚しつつあるし、われわれは新たな問題と直面することになる<sup>11)</sup>。学校組織や教育機関は、またそこで機能する専門家達は「個性化」を求めながら「画一化」に安心し、「組織的」であることと「個人の自由や良心」の間に相互圧力と軋みを感じはじめている。

「後近代」という概念は、例えば稲垣がいうように「後近代のはじまりとしての現代認識で、核兵器の登場でもって『後近代』の開始と規定する<sup>12)</sup>。」その近代で特徴づけられる歴史的特徴が「自由競争」であるとするならば、「現代」が特徴的にもつのは、「競争の原理」をひきずっている「論理の軟弱化」でもある。その意味では、大正年間に著された『現代体育教授法精義 (宮原義見著；復刻版)』は、「現代」を銘うってはいるが、大和民族の精神性や体育との問題に言及しているものの、「現代」にはあたらないと考えるべきである。その論理は強固であるが、排外主義の色彩すら強くおびている。

そして、「人類の滅亡」などという「ことば」が、リアリティーをもつとき、歴史的事実としての学校制度や教育や、一つの教室で営まれる授業が、どういった重みを持ちうるのだろうか。これは、スポーツ事象をどうみるかという問題と絡まって、体育授業という営みの問題を把握する新しい論理を、吉本らの現代教授学の延長上に如何に位置づけ、どう機能させるかという課題をもつことになる。

## 2) システマティックという「機械」論

有機性や連携性という、モノについても自然についても、そして人間理解についてさえも、システム理論の応用性は極めて高いものであった。システムという概念自体が、系でもあれば、方法でもあれば、形状・

機能でもあり得た。そして、体育の授業をシステムで捉えようとした研究もあった。授業の構造とプロセスは電気配線図の如きモデルが描かれたり<sup>13)</sup>、学習指導案をフローチャートで記述するという研究も、教育工学流に「情報の流れ」で「学習」を記述する研究<sup>14)</sup>も、一応の段階に達し、やはり方向性を模索しているように観察される。コンピューターの導入ばかりは進展するが、その進化するマシンやソフトについていけない状況、マシンが埃をかぶった状況は、どこにもみられる。また、近い将来のマルチメディア時代を志向して、光ファイバーのネットワークもますます拡張されつつある。こうした時代においては、学校における教師-生徒>>生徒-生徒>間の相互の関係性は、これまで通り正当に位置づくかどうかも疑問である。安上がりで確実な再現性の高い授業を求める運動は、どこで火の手があがってもおかしくない状況に満ちている。そして、コンピューターの応用技術としては、既にその要件を満たしていると言っても過言ではない。自由な学習の保障などということが、真面目な議論の対象にならないのは、まだ日本の学校教師や学校システムが信頼されているからと受けとめられるからか、やはり公式通り機械にはなじめないファジーな性格を「教授」や「学習」が含んでいる、という一つの性格が正当に評価されているからか。いずれにしても現在においても、また近い未来を想定しても、教育という世界にシステマティックという機械論が異常に増幅されてきた事実と、今後も増幅されていくであろう傾向は認めておかねばならない。

## 3) システミックという思想

システマティックという思想は、元々機械論ではないし、単なる有機体論でもない。サイバネティックス理論やバタランフィが一般システム論を著した折りには、生物やその生物の行動また生物がおりなす社会をすらも記述し、詳細に説明しようとする論理でもあった<sup>15)</sup><sup>16)</sup>。しかし、2)でもふれたように基本的には相互関係があるという意味での有機体理論と機械論への趨勢の中では、社会や集団・家族・授業のような文化的社会的装置への理論展開がややもすれば、遅れをとったことは事実である。そして、そうしたいわば人文社会学的意味での新しい「知の枠組み」としてシステミック論は登場してきている<sup>17)</sup><sup>18)</sup>。この最大の特徴は、かつての科学論の世界の対象になりえなかった主役以外の脇役達、例えば「勘」「経験」「ささやかな関係」や、そのモデル化の問題 (伊藤重行) や「認識の共有と進化 (北原貞輔)」というプロセスの問題、あるいはファースト・サイバネティックス (=逸脱解消性=形態維持機

能；丸山孫郎・伊藤重行), セカンド・サイバネティックス (=逸脱増幅性=形態生成機能；丸山孫郎・伊藤重行) といったトピックスを提示して, 「知の枠組み」を再構成しようとしている<sup>13)14)</sup>。こうした約 20 年前からの日本における新しいシステム科学の動きをシステミック論として押さえておく。

#### 4) 研究の目的

制度としてある学校や授業を, 相対的に純粹で具体的な授業の問題として認識する際, 何ほどかの程度授業を規定しているかも知れない諸々の変数は, 例えば子ども達の発達の違いとか, ある特定の生徒とある別の特定の生徒との人間関係とか, その日その日の気分や天気のような変数はこれまでの教育科学論においては無視せざるを得なかった。というより, 問題にする術をもたなかった。あるいは逆にすべての問題を政治性や社会の問題に還元してしまおう, という両極の論理に走る傾向すらみられた。そうした脇役として無視する問題性と同一のレベルで, すべての問題を政治のせいとしてしまう論理の間では, 統一的に教師が行為として何をなすべきか, どのように考えるべきかに対して, 説得性ももち得る論理も, 特に中等教育学校の場合, 形成されてないといって過言ではないと思う。同時にまた, 教師達を鼓舞するに十分な論理を構成し得ていないと言う弱点が, 改めて浮上してきたと把握している。

そこで本論においては, 改めて体育科教育がもつ問題性の整理を試みながら, システミック論の立場から①認識の対象として教科教育学の研究を問題にし, ②教師達の認識の対象としての体育授業を問題にしながら, ③新たに中学生や高校生を対象とした教授の知の枠組みに関するモデルの例を提示して, その可能性を論じてみる。

## II 教科教育学研究の盲点

教科教育学の生い立ちや, その後の発展傾向については別にも問題にした<sup>15)</sup>。結論的にいえば, 各教科のレベルで研究も実践もバラバラなのであり, 「全人的な人間教育」とか「人間形成」とかの共通のスローガンが, ほとんど根無し草に近いほど分裂している。だから, 教科教育学研究においては, 「数学的人間形成」や「理科的人間形成」「体育的人間形成」等が個々バラバラにあって, それらを別名「個別化」とよんだりもしている。子ども達の現実問題や生きる力に統一されていく原理もみえず, また教育の営みを教科という具体レベルにまで視点を具体化させたにもかかわらず, 全体像

をみえにくくしている, と把握せざるを得ない。

### 1) 教科内研究主義の罨

別にもふれたことであるが<sup>16)</sup>, かつて一般教育学が既に存在して, にもかかわらず教育実践の具体が語りきれない時代があった。そして, そうした問題性を克服すべく教科教育学が幾つかのモデルに従って構想され展開されてきた。その一つは, 斎藤らにみられるような「教授学」という授業を直接の研究対象と明確に位置づけた研究であり, 研究運動としても発展しつつあった。第二には新たな教育学あるいは, 具体性・実証性・科学性という方向性をもって各科教育法を克服すべき「学問領域」「教育学的領域」の「交差領域」といった性格をもつものであった<sup>17)</sup>。

組織的には大学における系構想としても学科構想としても, 大学院構想としても位置づいてきた。基本的に教員養成に直接・間接にかかわる性格をもってきた。かつての教員養成における教科教育法を既に凌駕したかに見える教科もあるのかも知れないが, 少なくとも教科のあるいは教科間の関連性や, 学校教育における他の領域(教科外活動や学校行事など)との関連は, ほとんど等閑視されてきた。この学問領域の成立は一方で「教科教育学」を成立させながら, 全体的な教育学としての統一性を著しく欠いてきたといわねばならない。このことは, 保健体育科教育学の中の「保健科教育」と「体育科教育」の, まじわることのない分裂や, 教科課程研究の不成立に典型的に現れていると言える。こうした分化傾向を専門化というか, 細分化傾向と呼ぶかでイメージは随分異なるけれども, この傾向はこと保健体育科にとどまる性格ではなくて, 制度的に成立しているすべての「教科」や「道徳」にも共通している<sup>18)</sup>。学問的に進歩する(?) ことで, ますます現場対応性・子ども達対応性を貧弱にしているとすれば, 極めて皮肉な話である。

### 2) 教科間発想と研究の趨勢

教科の関係を, 何らかの形で問題にする発想は幾つか考えられる。一つは, 現行の学習指導要領や学校経営にもかかわるが, 重点教科とか教科の比重判断のような問題である。第二には, 内容的かかわりである。重複内容や関連性の深い・浅いなどのかかわりで教科の間にも, 例えば数学と物理, 国語と他の殆どの教科と言うように, 何らかのかかわりは先ずあると前提する必要がある。様々な学問領域に付随する形で教科が存在するのは一つの側面ではあるが, すべてを説明出来るものではない。少なくとも情報爆発とか情報化社会とかいわれる時代趨勢のなかでは, 既存の教科の体

系が、また教科間の関連性が大きな問題性を秘めていることにかわりない。第三に、週休2日制完全実施の方向性や、それに伴うであろう教育改革を巡って新教科の構想も既に幾つも示されている。

例えば、安彦は未来からの教科といった立場もありうるとして、学校活動そのものを見直す立場から教科の性格として「究極的問題（環境・エネルギー・人口問題など）にかかわる教科・「過去からの学問的成果や方法を身につける教科」・「日常生活に必要な知識理解の教科」といった発想を試みている<sup>19)</sup>。その際「教科」と「教科外」の比重からみて第一の究極的問題にかかわる内容は「教科」にしておくべきであると主張する。その上で芸術的資質やスポーツの資質、すなわち今の「音楽・美術・図工・体育」などは整理統合して「個性」と「選択」の精神で小学校高学年からはじまる「クラブ」活動に割り振ることが望ましいともする。安彦に限らず教科の再編成にかかわる議論は相当活発になっている。そして、こうした議論の先に何がみえるかも、ある意味では見抜かれている。逆に問題にするならば、体育もそうであるが、他のいかなる教科においても、それらが様々な教育の形態が存在しうることや、限られた学校期間の限界、生涯学習社会への移行といった流れからみると絶対視される教科など、極々限られたものかも知れない。「過剰教育」論さえ指摘される中で、第15期中央教育審議会が週休2日制完全実施を含んだ、「21世紀を展望したわが国の教育の在り方」の教育問題の検討を始めようとしている。

### 3) 体育科内容学の意味理解

これまでの教科教育学の例えば、広島大学の教科教育学科における「内容学」などという陳腐な呼称もそうであるが、教育の現実を語る概念体系として「目標-方法-内容」などという、観念の体系を用いたことは限られた範囲かも知れないが、大きな誤解を産む元凶になっている。文字どおり目標なき授業とか、内容なき教育とかも語りにくい、方法や内容を伴わない授業や教育も語りにくい。というより、観念の体系としてもあり得ない……という状況が先ず存在する。従って、体育の内容学が「体育学」や「運動学」「技術内容学」などという構成要素をもつとなると、これまでの観念の体系にすら沿うかどうかすら不明である。少なくとも、教科教育学が創出される以前において、体育学は、そのまま相対的には実践用語に近いイメージで「体育の学」であろうとし続けてきていた。しかし、この歴史は心理学や生理学・医学・物理学などの影響をうけつつ、先鋭的に分化しつづけてきた<sup>20)</sup>。ここに、既にやや極論ではあるが「教育」の概念を放棄して、事象と

しての身体運動を無機質な物体の運動とアナロジーをもたせるような諸研究が、スポーツや運動の科学という名において展開されてきた<sup>21)</sup>。それに順応する形で、体育学は教科教育学の体育科教育学として保健教育（健康教育）とも分離・離反しつつあり、とりわけ授業の諸研究（授業研究・授業分析・教材開発研究・授業の形態論など）に分化してきている。それでいて、統合や応用の方向性は極めて曖昧である。

### 4) ネオ・フォーリズムという思想

新しい全体主義とでも翻訳されるのであろうこのタイトルの思想は、3)において人間の身体運動が随意運動として形成されることの意味や<sup>22)</sup>、単なるモノの運動と異なって、個々人の内的意味付けに成功しない限りその運動自体がスムーズに実行され、かつ継続され得ないことを示唆している。さらに北原の指摘するように、暗に蓄積情報（遺伝情報や環境情報）によって形成されている、いわば身体運動の「内的モデル」もしくは「概念構造」から「選択行為」を導出し「新しい情報の創発」を意味する神経系の自己組織性を意味している<sup>23)</sup>。人体のような生体システムも、授業のような社会システムにも、環境に対して開かれた系としてのシステムという特徴把握は相当前から確認されてきたことであるが、そのことにだけ、格別な意味を付与することは出来ない。むしろ、Maruyama(丸山, 1963)が見事に指摘するセカンド・サイバネティックスの考え方、すなわち「逸脱増幅システム」への着目と検討が必要であるように思われる。「サイバネティックスは、その成立以来、多かれ少なかれ自己調整的、平衡的なシステムの科学」とみなされてきたし、フィードバックという「逸脱解消的 (deviation counterraction)」な性格を、主として追及してきた。しかし、現実には「生命有機体の進化、様々な文化の勃興、情緒障害を生む対人関係、国家間の紛争」など当初の状態から遠ざかる相互因果的関係の過程に着目せねばならないとして、逸脱解消的相互因果過程を「形態維持」と呼び、逸脱増幅的相互因果過程を「形態生成」と名付けた<sup>24)</sup>。かつて、一時期問題にされながら、授業との関連を正当に問題に出来なかった重要なポイントである可能性が高いと考えている。経済学などではかなり精巧な論理形成に活用された鍵概念であるが<sup>25)</sup>、教育学や教授学的にはどうであろうか。

授業のシステムにおいて、ネガティブ・フィードバック（形態維持）とポジティブ・フィードバック（形態生成）の機能は、その新しい全体観とともに発想の転換と教育に関わる事物事象の把握の仕方を求めているように思われてならない。

### III 直接的コンタクトの意義と体育科教育

#### 1) 吉本概念体系の特徴

1980年代以降の吉本が著した、あるいは吉本を中心とする研究者や実践家が主張してきた、『現代教授学』系統の研究と主張は強烈な支持を得てきている。明治図書教育選書『授業観の変革(1992)』を中心に検討してみると、その第一の特徴として、そのサブタイトルにもみられるように、教師の生活世界は「まなざしで語りかけ・問いかけ」ることの他には存在しない、とさえいえる論理のやさしさと説得力がある。第二に吉本自身が「教授学の観念性や授業論の硬直が指摘されても仕方ないのかもしれない。教授学の『知』のパラダイム転換や『授業観』の変革が、今後、いっそう迫られ、強く求められるてくる<sup>26)</sup>」と『教授学』としての性格と科学性を近代サイエンスの論理としないことを明確に表明している点である。第三に特に初等学校では、世界のどこにもまねるべきモデルは、既に存在せず、「知のあり方」と創造的実践をきり拓く教授学のキーワードやコンセプトを確立すること、およびそれをきちんと共有することの重要性を示唆している点である。

子ども達と教師達の、あるいは「教授」という行為や「学習」という行為の「関係」のありかたを問題にして、これほどわかりやすく、これほどレトリック的なキーワードやコンセプトを創出し、かつ読者を鼓舞する論理があったであろうかと、今更ながらに思い知らされる。そして彼のコンセプト群は、例えば音楽に例えれば、いわば「演歌」的であり、「ニューミュージック」的でもあり、「浪花節」的でもありえて、教師に訴えるパワーをもっているのである。けっして、「シャンソン」や「ジャズ」「ロック」的ではない日本の文化性と歴史をふまえたコンセプトが創出されているのである。

#### 2) 「タクト論」からの検討

先に例えば、「演歌」的であり、「ニューミュージック」的でもありえて、かつまた「浪花節」的でもありえて、そうしたキーワードとコンセプトを駆使することで、吉本自身が日本の初等教育の授業の発展に、教科を問わず大きく貢献してきたといえる。

しかし、ノン・リニア性(小学校高学年あたりから、個人差はあるがストレートな反応が少なくなる傾向をさし、中学生や高校生ではいっそう強固な傾向として現れる)と、もとより身にかかわっている体育授業の直接性を改めて問題にしなければならない。彼らの年

代でのスポーツ的資質の固定化傾向も検討されるべきである<sup>27)</sup>。ノン・リニア性は、こども達個々人の特徴を反映した「個人差」ではすまない性質と把握しなければならないと考える。極めて一般性をもち、かつ個別のでもある。A教師には素直な明るい高校生が、B教師や他の教師に反応をみせないといった現象として出現することもある。確かに中学生や高校生は法律的には、成人とはみなされていないが、その興味・関心の対象は著しく拡大されていくし、したがって、いわゆる大人でもないが、純粋に子どもでもない。また多くは経済的には保護されている大人子どもなのである。

また、タクト論で指摘される、直接的コンタクトの性質や、教師の対生徒行為は、小学生とは異なる別のキーワードやコンセプトをも必要にしていると考えている。例えば、具体的には「義理的・人情的」対応であり、それは、学習すべき内容対象の特異的「正しさ」や、行為の「正当性」に付加されるべきものである。科学的真理・法則や芸術的資質・スポーツ的資質にかかわりながら、「積極的傾聴」「受け入れ」「アサーション<sup>28)</sup>」などを示唆するものである。また、こうした直接的コンタクトにおける微妙な「本音一建前」という「使い分けの論理」も「教師個々人一組織人教師」の分裂を予防する可能性のある論理が形成されるべきである。これらは、吉本の基本的コンセプトと重なりもするが、中学生や高校生は、小学生とは明らかに異なる年代であり、異なる年齢と異なる経験をもつものとしても認める必要がある。だから、異なったコンセプトで語られなければならないと、われわれは考えている。制度的に圧迫され、能力的に蔑視されることすら体験している高校生達に「義理的・人情的」にかかわりをもたねば「身をひらく」「心をひらく」などの現実的コンタクトを、相互に感じることなどは不可能に近いとも考えている。

#### 3) 「ドラマ論」からの検討

授業それ自体がドラマ的でなければ、感情の動き一理性の動きや感激を呼び覚ますものでなければ・・という。けれども、ただ「出席」しているのではなく「参加」している、ただ「通過」しているのではなく「経験」させていくとする吉本の授業の論理は、「身を賭す」とも表現できる強烈な「我」や「われわれ」意識と主体活動に支えられなければならない、「参加」も「経験」も成立しないと指摘してきた<sup>29)</sup>。さらに「居場所」の論理も、今日的には極めて新鮮である<sup>30)31)</sup>。中学生や高校生が、そして今のこの時代に生きる若者一般が、いかように語られようと、個々が個人史をもち、固有の人間関係に相互支持されているならば、さほど大きく問題にする

ことはない。しかし、現実には荒れ、分裂し、また時には犯罪にすら身を染める、こうしたケースは、確かに「荒れる個人」の「荒れない側面」をどう認めるかといった重要な視点を提起しているにもかかわらず、自ら固定化し、自らにも自虐的にラベルをはり続ける論理も認めておかねばならない。「意地」「面子」とか「いきおい」「なりゆき」である。このいわゆる大人とも子どもとも扱われない、発展途上の彼らの「危なさ」や「強烈なエゴ」など極端な姿をかいま見るとき、学校を否定し、教師を否定せざるを得ない彼らの「生き様」や「その変化」と、われわれの「仕事」の、どこに、どのような接点や、共通点を現実にもどように据えるかは、極めて重要な課題と把握される。まさに時間的非連続があり、空間的飛躍があるのであって、小学生と同じような「童謡」と「ノスタルジャー」を中途半端に含んだ論理では説明できない。

中学生や高校生の大半が、いわゆる「いい子」を、また「普通の子」を演じていて、同時に荒れる「危なさ」をもつのであるが、この世代の時代性に左右されない「危なさ」「生意気さ」かどうか、また彼らの世代がもつ「若者文化」とも絡めて特徴を押さえないければならないだろう。そうしなければ、彼らに通じる基本的なキーワードやコンセプトは見えてこないといえる。「大人の中の子ども性」・「子ども中の大人性」「男性の中の女性性」・「女性の中の男性性」・「危なさ」と一途さ」・「強烈な自己主張と諦め」「積極性と待避無関係性」も認められる。時代が今なるが故の「危なさ」「生意気さ」でなければ、通常の「歴史は繰り返す」・「今の若者は」・という論法でよい。しかし、憲法や法律・校則などを盾にしても説得できない彼らの行動、あるいは極めて衝動的に動く彼らの問題性は、多分に今日の日本全体の構造的な文化問題とも深くかかわっていると考えた方が正しいと思われる。もはやモラルや倫理・宗教といったある種の教義が、公的には殆ど無力化していることもあるし、政治という公的権力・権威も中央・地方を問わず地にまみれている。家族崩壊や親子断絶は指摘されて久しい。極論すれば、「かかわりたい」が「かかわりたくない」というような「自己防衛・自己殻化」や、従来型の秩序崩壊過程の中で、彼ら若者は「若者の考え方」「若者の文化」を創出しているとみなすべきである。だから、それが「無責任」とか「無秩序」・「三無主義」・「とりあえず主義」・「夢なし世代」とかの特徴をもっている、これがまさしく日本の若者文化の変化の特徴である<sup>32)</sup>。日本という国家の主体性において形成してきた社会的特徴の反映なのである。

中学生や高校生が、学校や教師に対応する際も、ノン・リニア性は強化されることはあっても、今のま

ま自然に弱体化する、平穩化するなどということは相当難しいと覚悟する必要がある。教師一般の問題意識すら正しいか否か定かとはいえない側面をもつ。だから、いかに「授業」という行為の中での「特別な社会化過程<sup>33)</sup>」・「スポーツへの社会化(Socialization into Sports)」と「スポーツによる社会化(Socialization via Sports)」という認識はあっても、日常と無関係にドラマ性を強調することはできない。幸い体育のような教科は、高校入試や大学入試と直接かかわることが少なかったから、また吉本とは異なった立場からの「ドラマ」性を追及しうる可能性は感じつつある。とりわけ勝負事・競争としてのスポーツは、ドラマ性を既に内包していることが多いからでもある。

#### 4) スポーツ指導をめぐる「ことば」「態度」

少なくとも現時点では、運動学習はスポーツの運動に限らず、自転車の操作習得や自動車運転技術習得においてすら、概念学習や形象学習と異なっていることは明確である。かつて、人間や生体を「情報処理」機構とみなす「知覚—運動行動」論や「セルフ・ケア」と自己組織化論においても、「トータル」という全体性への着目は認められたが<sup>34)35)</sup>、組織化という逸脱解消の過程にウエイトをおいた論理が展開されてきた。これは、先にも述べたように、ノイズや外乱条件を減少させて、まさに Maruyama の指摘する「形態維持」機構としての機能を強調している。

ところが、運動学習や動作学習では、初期的には維持すべき「形態」も「内的モデル」も「構造」もないに等しい状況を示しているのである。特に、はじめて体験するような運動ではそうである。だから、実際にやってみて、それらしき形態・内的モデル・構造とよばれるような情報蓄積と情報創出が可能になる。あるいはその形態・内的モデル・構造とよばれるものの変換・変質が可能になる。したがって、運動実践を媒介にして獲得される外界との相互作用の意味や、自らの身体への意識は、「身体知」もしくは「経験知」あるいはポラニーのいうような「暗黙知」をも含んで、ことばでかたることの出来るより遥かに多くのことを学ぶことになる。つまり、これは形態維持機能ではなくて、形態生成の機能として、また逸脱解消としてではなく逸脱増幅のはたらきというセカンド・サイバネティックスの特徴としてはたらいており、一つの重要な視点といえよう。

具体的には、吉本のいう基本コンセプト「まなざし」と語りかけと問いかけは、中高生の場合相当困難を伴うが、必要最低の条件として位置づくであろうし、それに加えて「義理と人情」にあふれた直接的コンタ

クトが教師の態度にもことばにも、まなざしにも求められる。だがこうした「義理」と「人情」に満ちた直接的なコンタクトは、何か絶対的な基準とか、判断基準をもつものでなく、われわれの感受性や価値意識の問題でもあることが最大の特徴である。

## IV コーチングの論理と教授学的知恵

### 1) 「科学的」という「実践」に対する概念の内実

スポーツ教育やスポーツコーチングにおける科学性は、ここ20年一つのトレンドを形成してきたかにも見える。科学的指導とか科学的コーチングとして華やかさを纏って、われわれにも少なからぬ影響を与えてきている。この科学性の傾向と照合しながら、いわばスポーツ指導にかかわる Teaching と Coaching を眺めてみたい。厳密な検討ではないが、Teaching は授業一般に対応して使用されることの多い概念であるし、Coaching は純然たるスポーツ指導というか、スポーツ・クラブや学校の部活動指導などに対応して使われている。職業的に独立している分野も認められる。

このことばのもつ歴史性や、特異性にもかかわらずこの両者を強烈に識別して用いるという研究態度は、今日においても相当根強いものである。問題を含んだままの提案であるが、現実現象として観察する範囲では、実に共通点が多いことも事実である。スポーツ活動やスポーツ練習の目的が、記述上異なる・・・とかいうのは、かなり形式上の問題であって、なによりも勝利が優先されるとかいうのも、同様の性格をもつ。勝利至上主義という批判は、これまでもよくみられたが、スポーツをする者から「勝ちたい」とかいう「気持」のような意味部分を抜いたら、既にスポーツにかかわることの相当の意味をなくす。ここにも、まだ多くの検討課題は残すものの、「義理的」にも「人情的」にも「人」にかかわり「スポーツ」にかかわる重要なポイントがある。

われわれが、強調したいことは、こうした Teaching にしろ、Coaching にしろ基本的に共通点として、直接的にはスポーツ活動を扱っていること、さらには直接的なコンタクトの質が活動のプロセスにおいて相当大きな影響力をもつこと、またその影響は常時ポジティブな方向のみをもたないこと、相互の信頼関係とかが最初から相当のレベルにあるのではなくて、意図的にか形成していかねばならないものである等の特徴である。「教えねばならないことは教えてはならない<sup>36)</sup>」といわしむる程、教える行為の対象を主体化させねばならないことなどである。

こうした、教える・指導する・導く・育てるといっ

た行為の中に位置づく科学性というのは何であろうか。科学という言葉への「認識」の問題でもあるが、少なくとも17世紀以来の要素還元的科学のイメージで説明も予測もしきらない部分や側面を含んでいることは常識の問題として把握されている。教師として、経験や学習によって得られた「実践知」「経験知」のような知の枠組みを想定するならば、ある種の結果(目的)に対して、逆時間的に計算しようところは徹底して計算し、予測度を高め、ロジックとして「因果」を見通す必要がある。その上で、どのような外乱影響や結果の歪みが予測できるかである。さらには、そのわれわれの見通しや、こうなるであろう「予測」を超越して派生する問題に、的確に素早く判断し、対応やかかわりを持つところに最大の特徴がみいだされることは、吉本に限らず多くの研究者が指摘している。この的確な判断・素早い判断と行動を、われわれはもっと重視すべきなのである。現実には「的確」とか「素早い」判断が、その場その場対応の具体的かつ特殊な状況のなかで、しかもその場を介してからしか、評価もフィードバックもかかわらない特徴をもつ。

### 2) 「競争-共同」の同居性と連続性

佐藤は、体育、スポーツにおける競争と協同を以下の如く類型化して、究明の課題を提示している。①生活の原理としての競争-協同の概念整理、②教育陶冶方法としての競争-協同の概念理解、③スポーツなどの集団場面における競争-協同の概念理解の三つである<sup>37)</sup>。だが、佐藤も重ねていうように、③のスポーツにおける競争-協同も単純に体育学の研究領域に安住すべき性格のものではなくてきている。概念上の意味内容の差異は、スポーツも教育も生活も、まさに「生活」という概念で統一される可能性を含んでいる。慎重であらねばならないが、スポーツにかかわることも、あるスポーツ教育を受け入れることも、まさに生身の人間の生活の重要な部分であり、生活の連続性なのである。それゆえ、先述のそれぞれが、特有の性格を含みつつも、生活の二重構造、三重構造をもつことから考えれば、まさに生活そのものの中に同居している連続性という概念で統一されるべき課題をもつのではなからうか。

問題は、「競争」がいいとかわるいとか、「協同」は絶対いいとか、そうした価値づけを簡単にしてしまわないことである。価値づけは、他の諸変数との絡みにおいても評価機能として結合すべきであり、評価する教師なり自己なりが、その総合的価値尺度において、現実におこなっていることでもある。したがって、評価主体の、これも「自らを賭した行為」であって、そ

の賭した行為それ自体が他者の評価の対象でもありうる。そうした前提の上に、「競争」を仕組む意味と場、「協同」すべき相手と対象とその意味が、明確に仕組まれて、授業の中に臨機応変にもくろまれていく必要がある。

### 3) 現代体育教授学理論研究の方向性

「体育教授学」という命名と、一方に「スポーツ教授学」という構想も出版物も既にドイツやアメリカなどで一部にある。スポーツという社会的文化は、例えば人類史上、身体の運動が如何なる意味や解釈の可能性をもつかとも、相対的には別次元で、「教育」という意味や、「健康」「体力」ともやや別の次元での究明を必要としている。何故なら、教育のために開発されたスポーツは皆無ではないが、素朴な起源は「遊戯説」「労働説」が混在している。まして、戦後のスポーツの学校への導入のごときは、フェアプレーの精神などを強調してきてはいるが、スポーツそのものの発生や発展に直接関与してきたものでもない。極めて自然的にして、さらには極めて人間的に「遊戯」「戦技」「労働訓練」などと組み合わせられて、誕生しかつ発展してきたものと理解される。

学校でスポーツ教育を教育・訓練として格別な意味を付与する際、今日的には一般論としては、その格別な意味をもたせることに、必ずしも成功していない。否、学校に固有の格別な意味を付与できないから、中等教育学校に「選択制授業」が導入されて、その「意味」は学習者が構成するものとして、期待されてきている。単なる「体力」でも「運動不足解消」や「幻想としての健康」や、スポーツはどうあつかも「文化」であるなどと、のんびりしておれる折りではないと、われわれは考えている。

しかし、学校におけるスポーツ教育の格別な意味は「ある」「ない」と議論する性格のものではない。教師達と、学習者達とで「ズレ」を認めつつも創出していくもので、内容研究や方法研究は、その意味での豊かさを、それぞれ格別の意味をもって究明されるべきものである。

## V まとめとしての課題

われわれの体育教授学を語る際、基本的コンセプトとして、純粋に子ども達と呼ぶべきでない教育対象をもつことを特徴としている。いわゆる経済的に自立しているかどうかも含めて、大人でもなければ、子どもでもない中学生や高校生の世代は身の丈において親を凌駕している。そして、小学生とは異なった成長・発

達の論理や固有性をもっていても何等不思議ではない。まさに非連続や連続の「矛盾」、「自己」と「対象化した自己」との「矛盾」を最たる特徴としているとみなしてもよからう。

こうした世代に対応する教授の論理を形成するために、吉本の近代教授学論理を参考にしながら、独自のコンセプト（「義理的」「人情的」かかわり）の可能性を検討した。日本という地理的文化的風土的考察も必要になると思うし、学校という文化装置・制度としての強制装置論にも言及せざるを得なかった。そのうち、中学生や高校生に対して、可能な限り直接的に「体育」という「制度としての授業」を人間らしくする可能性の一つのコンセプトは、「義理」「人情」的かかわりである。これまでの議論の要点は以下のように要約される。

- 1) スポーツ教育や体育科教育において、組織化の方向ばかりが強調されてきたが、丸山らの指摘するようなセカンド・サイバネティクス（形態生成）をこそ重視する必要があることが示唆された。
- 2) 吉本の現代教授学を「まなざし・語りかけ・問いかけ」を基本コンセプトと捉えるならば、特に中等教育学校における「体育授業」では、これらに「義理的にしてかつ人情的」なかわり方を加味して、考察され、構想されねばならない。
- 3) 中学生や高校生のノン・リニア－性は、一般的にみられる傾向ではあるが、必ずしも固定化したものでも必然的なものでもない。まして、教授上必ずしも否定されるべき特質でもない。だから、義理的にも人情的にもかわりを構想しなければならない。
- 4) 中学生や高校生のノン・リニア－性は、むしろ積極的な相互の作用を生み出す契機と捉えるべきであるし、われわれの教授行為への自己評価の重要な一視点と把握すべきである。

## 文献および注

- 1) 吉本 均：現代教授学，p.9-11，福村出版，1977
- 2) 1) の前掲書，p.11
- 3) 大田 堯：なぜ学校へいくのか，pp.59-107，岩波書店，1995
- 4) 遠藤 愨，他：現代日本の構造変化（第3版），pp.208-227，1995
- 5) 稲垣正浩：現代認識と近代スポーツ，体育の科学，44(9)，pp.702-706，1994
- 6) 坂本和丈：VTRによるバレーボールの授業分析，体育学研究，15(1)，1970
- 7) 坂元 昂：教育工学的接近による授業改造の課題，



- 現代教育科学, No.290, 60-65, 1981
- 8) F,バルタランフィ／長野 敬,他訳:一般システム論その基礎・発展・応用(第3版), pp.182-200, みすず書房, 1975
  - 9) 山崎与平:技術論と技術教育, p.219-220, 青木書店, 1978
  - 10) 高木純一:システム科学, pp.138-171, 筑摩総合大学, 1972
  - 11) 北原貞輔・伊藤重行:日本的システム思考, pp.53-84, 中央経済社, 1991
  - 12) 松岡重信:現代体育教授学の構想(IV)ー身体運動に対する内的「指向性」と外的「促し」ー, 広島大学教育学部紀要2部43号, pp.123-133, 1994
  - 13) 伊藤重行・北川敏男:システム思考の源流と発展, pp.53-76, 九州大学出版会, 1987
  - 14) 13)の前掲書, pp.77-103
  - 15) 松岡重信, 他:教科教育学の再点検ー研究史と教科区分および教科性格の研究の視点よりー, 広島大学教育学部紀要, 第2部第39号, pp.123-130, 1990
  - 16) 松岡重信:教科内研究と教科間研究の課題ー体育教育学の研究方法を検討する立場よりー, 広島大学教科教育学会紀要, 第6号, pp.11-30, 1991
  - 17) 日本教育大学協会:教科教育学の構想
  - 18) 松岡重信:16)の前掲書, p.18
  - 19) 安彦忠彦:教科教育の再編成ーどこが問題かー, 現代教育科学, No.463, pp.61-65, 1995
  - 20) 岸野雄三:学問の分化と総合, 体育原理研究会「体育学研究の分化と総合」所収, pp.37-48, 1972
  - 21) バイオメカニクスの研究やスポーツ方法学の研究にこうした傾向は強くみられる。例えば異分野で開発された実験機器(自動車の安全基準づくりのための装置など)を導入して, 人間の動作をモノ化して客観化することに価値をおいているような傾向をさす。
  - 22) ア・ヴェ・ザボロージェツ／西牟田久雄訳:随意運動の発達ー認識と行為の形成ー, pp.91-149, 世界書院, 1973
  - 23) 北原貞輔:認識構造ーその共有と進化, 伊藤重行, 他「システム思考の源流と発展」所収, pp.56-63, 1987
  - 24) 丸山孫郎:セカンド・サイバネティックスー逸脱増幅相互因果過程, 伊藤重行, 他「システム思考の源流と発展」所収, pp.78-103, 1987
  - 25) 北原貞輔:経営進化論, pp.151-196, 有斐閣, 1990
  - 26) 吉本 均:授業観の変革, pp.1-4, 明治図書, 1992
  - 27) 松岡重信:現代体育教授学の構想(II), 広島大学教育学部紀要2部41号, pp.155-165, 1993
  - 28) 平木典子:アサーショントレーニングーさわやかなく自己表現>のためにー, pp.11-45, 日本・精神技術研究所, 1993
  - 29) 吉本 均:出席と参加の論理, 通過と経験の論理, 現代教育科学, No.305, pp.125-131, 1982
  - 30) 吉本 均:授業観の変革ーまなざしと語りと問いかけを, pp.52-61, 明治図書, 1992
  - 31) 上野ひろみ:教室を「まなざしの範囲」にする, 吉本均編著「新・教授学のすすめ1, 『まなざし』で身に語りかける」所収, pp.35-43, 明治図書, 1993
  - 32) 光武 幸, 他:学校における消費者教育と消費者問題ー学生へのアンケート調査をもとにー, 国民生活研究, 第29巻1号, pp.64-76, 1989
  - 33) 吉田 毅:スポーツ社会学における社会化論への一視覚:主体性をめぐって, 体育学研究, 37, 255-267, 1992
  - 34) 佐藤 裕:「自分の体と動作への理解」を深めるーセルフ・ケア能力をどう育てるかー, 新体育, 50, PP.771-777, 1980
  - 35) 佐藤 裕:知覚-運動行動の自己組織化の育成ー人間の根源からの問いかけー, 現代教育科学, No.311, pp.30-36, 1982
  - 36) 吉本 均:媒介の技術と構想力の論理, 現代教育科学, No.307, p.126, 1982
  - 37) 佐藤 裕:スポーツにおける競争ー協同ー集団場面類型化と場面構成ー, p.278, 新体育社, 1982